



TITLE:

瀬戸だより(10月)

AUTHOR(S):

---

CITATION:

瀬戸だより(10月). 天界 1937, 18(199): 29-29

ISSUE DATE:

1937-10-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167559>

RIGHT:

## 瀬戸だより (10月)

大昔から見られてゐる黄道光でありながら、さてまとまつた研究材料を得るべく手をつけようとすれば、すべてが新しく、時には「一體これではどうなることか？」と心配するが、心配が大きいだけ働き甲斐があるといふもので、今ではスツカリ腰をすゑておちついてゐる。ありふれたことでは現在の科學戰陣にはただ後れるだけで、とても!!といふところをねらつてゐる。

創立から世界の中央局としての重要使命があり、外國の既知、未知の學者と文通してゐると、ありがたいことには私達の氣のつかないことを指摘してくれる。これはお互様で、人種を超越して純學術の美しい進歩が見られるのである。(荒木健兒)

×                  ×                  ×

瀬戸は風のない土地です。此頃は特に静かで、時によると風力計は動いてゐるのかしら、などと思ふ程です。此の間の颱風にしても、廣島、尾道、岡山と荒しながら此處だけは取残して行つたやうでした。何だか物足らない程静かです。

●●  
松たけの季に這入りました。此の附近でも御多分に洩れず十重二十重、嚴重な繩張りです。しかし、この繩張りの中にある吾々はどうしたものですか？ 鋭意研究中です。(藤野)

## ★ 句   二   つ ★

○ 三つ星に灯せる窓の閉されぬ

○ 春の夜を大火と競ふ火星かな

大阪   アンタレス生